

7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要

● スタッフ一覧

・教授(兼任) 安永 純一郎 (血液・膠原病・感染症内科学講座)

日本血液学会評議員、日本癌学会評議員、日本HTLV-1学会評議員、日本内科学会認定内科医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医

・准教授(兼任) 中田 浩智 (感染免疫診療部)

日本内科学会認定内科医、インフェクションコントロールドクター(ICD)、抗菌化学療法指導医、日本エイズ学会認定指導医、日本感染症学会認定感染症専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本感染症学会認定感染症指導医

・特任講師 岩永 栄作

日本内科学会認定内科医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本内科学会総合内科専門医

・特任助教 古田 梨愛

日本内科学会認定内科医、日本医師会認定産業医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医

・特任助教 岡林 比呂子

日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本呼吸器学会専門医・指導医、日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医・指導医、難病指定医、身体障害者福祉法指定医

● 寄附講座設置概要

現在大流行している新型コロナウイルス感染症をはじめ、多くの新興ウイルス感染症が出現し、人類にとって大きな脅威となっている。新型コロナウイルス感染症で実感されたように、人々の移動の高速化により一箇所で発生した感染症が瞬く間に全世界に拡がる時代となっている。

新興感染症や災害時の感染症に対応できる幅広い知識、経験を有する医師・メディカルスタッフが極めて少ない状況であり、これらの感染症に対応できる人材の育成は喫緊の課題となっている。

本講座においては、熊本県全域で感染症に対応できる医療体制の連携・強化を図ることを目的として、熊本大学病院の感染症専門医を中心に、血液内科や呼吸器内科などの関連診療科及び感染制御部などの協力を得て、病院一体となって、講座運営、教育を行うこととしている。プランとしては、5年間で9名の感染症専門医を育成することとしており、先に設置された市の寄附講座においては「熊本市」へ、県の本寄附講座においては、「熊本市以外の熊本県全域」へ、その育成した人材を送り込むこととしている。併せて、熊本県内の感染認定管理看護師、技師等に対する講演会の開催等、リカレント教育の実践により、県内各地域における医療現場の最前線に立つ医療従事者の人材育成、ひいては、その地域のゆるぎない医療体制の確立へと繋げていければと考えている。熊本大学病院の理念には、「高度な医療安全管理によって、患者本位の医療を実践し、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献すること」がうたわれており、これらの課題の解決に向けて貢献することは、社会的使命の一つであると考えている。

2月	<p>【令和6年度後期感染症セミナー】</p> <p>開催日時：令和7年2月15日（土）13時30分～15時30分</p> <p>開催場所：熊本城ホール</p> <p>座長：坂上拓郎（呼吸器内科）、安永純一郎（血液・膠原病・感染症内科）</p> <p>演者：山中 徹（熊本南病院呼吸器科部長） 櫻井 滋（東八幡平病院危機管理担当顧問）</p> <p>テーマ：感染症の有事に備える～再興感染症と災害感染対策の現場からの学び～</p> <p>内容：① 山中 徹：高齢者施設における結核対策 ～その必要性和実際～ ② 櫻井 滋：災害時の感染制御支援について ～DICTの生い立ちと現在地～</p>
3月	<p>【令和6年度第2回抗菌薬適正使用に関する研修会】</p> <p>開催日時：令和7年3月19日（水）16時00分～17時00分</p> <p>開催場所：熊本労災病院</p> <p>演者：中田 浩智、岩永 栄作</p> <p>対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者</p> <p>テーマ：感染症への理解と感染対策</p> <p>内容：日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策 ～アクションプランについて～</p>

3. 活動報告

● セミナー等の開催

感染症対応実践学寄附講座の活動目標として医療者、行政担当者も含めた多職種を対象としたセミナーを年2回以上企画・実施している。令和6年度の開催実績は以下の通りである。

- 令和6年度前期感染症セミナー：令和6年10月6日（約100名）
テーマ：新型コロナだけじゃない！～あなたの身近に迫る感染症の脅威～
開催場所：熊本城ホール
- 令和6年度後期感染症セミナー：令和7年2月15日（約100名）
テーマ：感染症の有事に備える～再興感染症と災害感染対策の現場からの学び～
開催場所：熊本城ホール
- 八代地域での講演会：2025年3月19日（約50名）
開催場所：熊本労災病院
テーマ：日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策

● 各セミナーの実施概要

○ 熊本大学病院 令和6年度 前期感染症セミナー

<開催概要>

令和6年10月6日に「熊本大学病院 令和6年度 前期感染症セミナー」を、熊本城ホールでの現地開催およびWebでのハイブリッドセミナー形式にて開催した。テーマを「新型コロナだけじゃない！～あなたの身近に迫る感染症の脅威～」と題し、中田 浩智先生（熊本大学病院）から「増加する性感染症」、和田 正文先生（上天草市立上天草総合病院）から「マダニ媒介感染症」についてご講演いただいた。

性感染症への対応や、熊本県地域特有のマダニ関連感染症について最新知見の解説がなされた。参加人数は約100名で、医師、薬剤師、看護師、獣医師、介護職、臨床検査技師など多職種の聴講があった。

論文、執筆

- Takashi Noda, Kotaro Nochioka, Koichi Kaikita, Masaharu Akao, Junya Ako, Tetsuya Matoba, Masato Nakamura, Katsumi Miyauchi, Nobuhisa Hagiwara, Kazuo Kimura, Atsushi Hirayama, Kunihiko Matsui, Hisao Ogawa, Satoshi Yasuda, on behalf of the AFIRE investigators. Antithrombotic therapy for stable coronary artery disease and atrial fibrillation in patients with and without revascularisation: the AFIRE trial. *EuroIntervention*. 2024 Apr 1;20(7):e425–e435. doi: 10.4244/EIJ-D-23-00396
- Kunihiko Matsui, Kengo Kusano, Masaharu Akao, Hikari Tsuji, Shinya Hiramitsu, Yutaka Hatori, Hironori Odakura, Hisao Ogawa. Observational study of frailty in older Japanese patients with non-valvular atrial fibrillation receiving anticoagulation therapy. *Sci Rep*. 2024 Jun 22;14:14423. doi: 10.1038/s41598-024-65237-4
- Yasuhiro Otsuka, Masanobu Ishii, Noriaki Tabata, Seitaro Oda, Masafumi Kidoh, Yuichiro Shirahama, Koichi Egashira, Naoto Kuyama, Taku Rokutanda, Katsuo Noda, Eiji Horio, Tomohiro Sakamoto, Takashi Kudo, Hideki Shimomura, Tomokazu Ikemoto, Ryusuke Tsunoda, Taishi Nakamura, Kunihiko Matsui, Koichi Kaikita, Kenichi Tsujita; ENRICH AF TAVI Investigators. Subclinical leaflet thrombus in patients with severe aortic stenosis and atrial fibrillation -ENRICH-AF TAVI study. *Sci Rep*. 2024 Jun 28;14:14902. doi: 10.1038/s41598-024-65600-5
- Naoto Kuyama, Satoshi Araki, Koichi Kaikita, Nobuhiro Nakanishi, Naoya Nakashima, Shinsuke Hanatani, Yuichiro Arima, Masahiro Yamamoto, Taishi Nakamura, Eiichiro Yamamoto, Kenichi Matsushita, Kunihiko Matsui, Kenichi Tsujita. Mineralocorticoid Receptor Blocker Prevents Mineralocorticoid Receptor–Mediated Inflammation by Modulating Transcriptional Activity of Mineralocorticoid Receptor–p65–Signal Transducer and Activator of Transcription 3 Complex. *Journal of the American Heart Association*, 13(18), e034672. doi: 10.1161/jaha.123.030
- Matsui K. Good News or Bad News? *JMA J*. 2024 Apr 15;7(2):222-223. doi: 10.31662/jmaj.2024-0025. Epub 2024 Mar 18. PMID: 38721081
- Sugawara M, Kojima S, Hisatome I, Matsui K, Uchiyama K, Yokota N, Tokutake E, Wakasa Y, Hiramitsu S, Waki M, Jinnouchi H, Kakuda H, Hayashi T, Kawai N, Mori H, Tsujita K, Ohya Y, Kimura K, Saito Y, Ogawa H; Febuxostat for Cerebral and CaRdiorenovascular Events PrEvEntion StuDY (FREED) investigators. Impacts of Febuxostat on Cerebral and Cardiovascular Events in Elderly Patients with Hyperuricemia: Post Hoc Analysis of a Randomized Controlled Trial. *Clin Pharmacol Ther*. 2024 Jun;115(6):1358-1364. doi: 10.1002/cpt.3217. Epub 2024 Feb 23.
- Ishizuka K, Shikino K, Kuriyama A, Nishimura Y, Tanaka E, Nonaka S, Sadohara M, Moriya M, Yamamoto N, Wada Y, Makiishi T. A proposal for coping strategies on burnout among Japanese resident physicians. *Journal of General and Family Medicine*. page 83-84 Vol.25 2024.
- Kunitomo K, Tsuji T, Kouzaki Y, Yoshimura F, Kubosaki J, Shimizu T. Factors Affecting Diagnostic Difficulties in Aseptic Meningitis: A retrospective observational study. *Diagnosis*. Vol. 11, No. 1, pp. 29–36, 2024
- 久保崎 順子, 「後医は名医? 始めは急性腸炎と診断されていたが…」, 日経メディカル「診療バイアス」連載記事, 2024年7月、Web掲載(ページなし)

研究

- 松井 邦彦 (研究分担者), 基盤研究 (C) 「粒子状物質による急性心筋梗塞や院外心停止の発症および発症メカニズムの解明」, 研究期間: 2021/4/1-2025/3/31
- 松井 邦彦 (研究分担者), 基盤研究 (A) 「臨床現場での多重課題における意思決定要因の解明」, 研究期間: 2020/4/1-2025/3/31
- 荒木 智, 基盤研究 (C) 「トレハロースによる腸 - 脳 - 心連関の解明」, 研究期間: 2022/4/1-2025/3/31
- 佐土原 道人, 「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関する質的研究」, 研究期間: 2018/08/20-2025/03/31
- 佐土原 道人, 「働き方改革のためのホスピタリスト・システムの導入に対し、米国で働く日本人ホスピタリストはどのような見方をしているか?」, 研究期間: 2018/09/20-2025/03/31
- 佐土原 道人, 「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関するアンケート調査」, 研究期間: 2019/06/21-2025/03/31
- 佐土原 道人, 「研究倫理と公正に係る患者・市民参画 (PPI) に関する質的研究」, 研究期間: 2023/12/05-2025/03/31
- 佐土原 道人, 「ポストコロナの地域医療特別実習の教育的効果とコミュニティへの視点に関する研究」, 研究期間: 2023/11/22-2025/03/31
- 佐土原 道人, 「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の「責任ある研究・イノベーション (RRI)」推進に資する取り組み」, 研究期間: 2022/12/01-2025/03/31
- 高柳 宏史, 基盤研究 (C) 「ICPC-3 日本語版の開発」, 研究期間: 2024/4/1-2027/3/31
- 北村 泰斗, 佐土原 道人 (研究開発分担者), 「軽症・中等症として入院した COVID-19 患者における入院長期化の関連因子」, 研究期間: 2022/12/05-2029/03/31

学会発表

- Michito SADOHARA, Kosuke Honda, Taito Kitamura, Hiromichi Tanaka, Hiroki Irie, Kunihiko Matsui. A FIRST REPORT OF FOODBORNE BOTULISM CAUSED BY TYPE C TOXIN WITHIN A FAMILY IN JAPAN. Annual Meeting of the Society of General Internal Medicine 2024. 2024/5/15~5/18. Boston, MA. Sheraton Boston Hotel and Hynes Convention Center . (Poster presentation)
- Michito SADOHARA, Kunihiko MATSUI. A RARE CASE OF PRIMARY INTESTINAL LYMPHANGIECTASIA (WALDMANN'S DISEASE) DIAGNOSED DEFINITELY AFTER 30 YEARS AND DEVELOPMENT OF EXTRA-INTESTINAL DIFFUSE LARGE B-CELL LYMPHOMA. Annual Meeting of the Society of General Internal Medicine 2024. 2024/5/15~5/18. Boston, MA. Sheraton Boston Hotel and Hynes Convention Center . (Poster presentation)
- Taito Kitamura, Michito Sadohara, Kunihiko Matsui. THE FAVORABLE PERCEPTION AND EDUCATIONAL IMPACT OF A FIELDWORK AND LODGING TRIPS FOR MEDICAL STUDENTS WITH SCHOLARSHIPS AND OBLIGATIONS TO WORK IN RURAL AREAS. Annual Meeting of the Society of General Internal Medicine 2024. 2024/5/15~5/18. Boston, MA. Sheraton Boston Hotel and Hynes Convention Center . (Poster presentation)
- 佐土原 道人, 松井 邦彦, 「臨床研究実施段階の研究者と研究参加者の捉え方のギャップと配慮すべき研究倫理・公正の事項とは?」, 第 56 回日本医学教育学会大会, 2024/8/9 ~ 8/10, 東京都板橋区, 帝京大学板橋キャンパス, (ポスター)
- 高柳 宏史, 「熊本大学の地域枠学生による医療者教育の取り組み : 地域医療総合演習」, 第 56 回日本医

学教育学会大会、2024/8/9-8/10、東京、帝京大学板橋キャンパス、(口演)

- 小山 耕太、「ポストコロナ時代の地域医療教育」、第10回九州地域医療教育研究会、那覇市、沖縄県立博物館・美術館、2024/5/11、(口演)
- 久保崎 順子、「SGLT2阻害薬に関連した正常血糖ケトosisの2症例」、第30回 熊本医療センター医学会、熊本市、国立病院機構熊本医療センター、2025/1/18、(口演)

講演会、講師

- 松井 邦彦、「この15年間を振り返って」、熊本県地域医療支援機構、令和6年度熊本県地域医療支援機構講演会、2025/3/18、熊本市中央区、熊本大学病院 くすのきテラス3階 大会議室、(口演)
- 佐土原 道人、「研修方法と研修評価」、2024年度第2回看護師特定行為指導者養成講習会、2024/11/10、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「社会が求める医師の臨床能力とは？、臨床研修の充実に向けて『研修の現場の問題点と対応』」、第23回熊本大学病院群臨床研修指導医研修ワークショップ、2024/11/29, 11/30、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「研修方法と研修評価」、2024年度第4回看護師特定行為指導者養成講習会、2024/12/22、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「研修評価」、2024年度全日病指導医講習会、2025/2/2、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「医師臨床研修制度の理念と概要、臨床推論を引き出すプレゼンテーションの指導、臨床現場での評価とポートフォリオ、指導医に必要な医療安全・労働安全の知識、フィードセッションの体験」、第30回徳洲会グループ指導医養成講習会、2025/2/8, 2/9、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、石塚 晃介、「バーンアウトに対するマネジメント～個人レベルと組織レベルでのアプローチ～」、ACP PWC オンラインセミナー、2025/2/13、(オンラインセミナー)
- 高柳 宏史、「地域保健医療におけるAI利活用の展望 2025 超高齢化社会の訪れ -SDGsと地域創生」、日台青年国際フォーラム、2024/5/30、(講演)
- 高柳 宏史、「備えあれば憂いなし災害医療のABC～総論と災害サイクル～」、Dr.'s Prime Academia、2024/7/28、(講演)
- 高柳 宏史、「家庭医療専門医による臨床研究ネットワーク」、日本プライマリ・ケア連合学会専門医部会フォーラム、2024/11/10、(ファシリテーター)
- 高柳 宏史、「備えあれば憂いなし災害医療のABC～CSCATTT～」、Dr.'s Prime Academia、2024/11/12、(講演)
- 高柳 宏史、「ICPC抄読会」、ICPC抄読会、2024/11/14、(講演)
- 高柳 宏史、「災害の地域への影響」、福島県立医科大学修士課程講義、2024/12/4、(講義)
- 山本 幸近、西郡 椋也、土田 紗愛、吉岡 志保、松尾 絹子、高柳 宏史、「世代を超えて語ろう！！しくじり経験談から学ぶ未来」、日本プライマリ・ケア連合学会 第19回九州支部総会・学術大会、2025/1/12、(ファシリテーター)
- 高柳 宏史、「ICPC-3概説」、ICPCセミナー、2025/3/20、(講演)
- 小山 耕太、「熊本県の医師偏在解消に向けて」、熊本県全国自治体病院協議会熊本県支部定時総会、2024/7/12、(口演)
- 久保崎 順子、「院内急変事例の検討」、月曜会(内科症例検討会)、2024/1/15、(口演)
- 久保崎 順子、「下顎骨髄炎について」、月曜会(内科症例検討会)、2024/5/20、(口演)
- 松田 圭史、「貸与医師としての義務を終えて」、熊本県地域医療支援機構、令和6年度熊本県地域医療支援機構講演会、2025/3/18、熊本市中央区、熊本大学病院 くすのきテラス3階 大会議室、(口演)



おわりに

1. 教員

佐土原 道人 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座]

診療支援先は、昨年度も、阿蘇医療センターでお世話になりました。様々な病院から実習、研修に来ている学生や研修医からよい刺激を受けております。

総合診療専門研修プログラム関連では、2024年度は修了者2名が専門医試験に合格し総合診療専門医となりました。次年度も3名の専攻医が新しく加わり、当総合診療専門研修プログラムへ毎年途切れずに採用できています。気がつけば、総合診療科、地域医療支援センター、寄附講座関連のいわゆる医局の所属者は、各所合わせて20名以上になりました。ゆっくりですが、着実に総合診療専門研修プログラムの安定した運営と専門医育成ができてきております。次年度は、制度開始初年度の専門医の専門医更新もひかえております。引き続き専攻医の専門研修を各連携施設でお願いすることになりますので、ご指導をよろしく願います。

地域枠学生や自治医科大学学生を対象に行っている地域医療特別実習も、夏季と冬季の2回に行うのも定着してきました。その成果は、参加学生自身が、2024年5月の九州地域医療教育研究会と6月のプライマリ・ケア連合学会で発表しました。まあ、地域医療特別実習で行った新しい教育手法の試みを2025年フロリダで行われる米国総合内科学会で発表予定です。我々の教育活動を世界に発信できることは、うれしい限りです。今後ともよろしく願いいたします。

高柳 宏史 特任助教

[地域医療支援センター]

コロナ禍後に初めて海外に足を延ばした(しかも2度)という点をとらえると、私自身の中でもコロナ禍の制限や抑制がとれたのだと思いました。2018年に高齢者医療におけるAIへの期待

と題して老年医学会雑誌に掲載した記事を目にされて、台湾にある中華医事科技大学よりシンポジウムでの講演依頼をいただきました。シンポジウムでは、地域の健康・保健に対する取り組みにおけるAIの利活用について講演を行いました。しかし、今振り返って、すでにその講演の内容は古いものになってしまっています。そのくらいAIが社会の中や、専門分野の中で急速に浸透してきていると思います。

昨年は台湾だけでなく、イギリスとアイルランドにも足を運びました。世界家庭医機構(WONCA)の国際分類委員会(WICC)の日本委員としての参加です。対面での参加は初めてでしたが、諸外国での取り組みを垣間見ることができました。まったく医療における情報の集積方法、コーディングなどが日本とことなるのだと改めて理解しました。一方で、日本でどんな情報源を持つべきかなどについても知見を深めることができました。また新たなプロジェクトの一つとして、大規模言語モデル(LLM)を用いての医療情報のコーディングプロジェクトが話し合われました。ここでもAIの話題がでてきたと印象深かったです。

イギリスのWICCに参加したのち、アイルランドにわたってWONCA Europe 2024 conferenceに参加してきました。ここでもやはりAIに関連するトピックが基調講演や、ワークショップ、一般口演などで発表がありました。

私自身も、Chat GPT、GeminiなどのAIツールを用いるようになりましたし、多くの方がそれらのAIツールを使うようになりました。そう考えると、2024年はAIがより身近に躍進、浸透した年であったように思います。

堤 龍子 特任助教

[地域医療支援センター]

今年度から地域医療支援センターで勤務し、早くも1年が経ちました。これまでは熊本県の地域医療で主に臨床を行ってきたため、大学病院での診療や教育活動は私にとって新鮮な経験でした。また、女性医師・子育て医師支援専任として、女性医師同士が意見交換を行える場を設定し、対面・

オンラインを合わせて7回実施することができました。

私自身が地域医療に従事し、地域で妊娠・出産・育児をした経験を活かしながら、現在地域医療を行っている女性医師から、地域で働く楽しさや悩みを直接聞くことができたと感じています。また、アンケートも実施し、多くの課題が依然として存在していることが明らかになりました。お忙しい中、アンケートにご協力くださった皆さま、意見交換会にご参加くださった皆さまに心から感謝申し上げます。

今後は、こうした活動を継続しながら抽出された課題を整理し、県や各医療機関と連携を取りつつ、その解決策を模索していきたいと考えています。地域で勤務する医師や、地域卒の医学生の皆さんの力になれるよう、来年度も精いっぱい取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

北村 泰斗 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座]

今年度もひきつづき、地域医療・総合診療に関連した臨床研究、地域卒学生・医師のキャリア支援、医学部カリキュラム、診療支援(学内総合診療科外来、そよう病院外来、くまもと県北病院救急外来)等の活動に関わらせていただきました。一方、テレビ会議システムを利用した合同WEBカンファがなかなか開催できなかったのも、本年度は専攻医の学会発表等に合わせて企画できたかなと思っています。

地域卒学生・自治医大生を対象とした夏季・冬季地域医療特別実習では、みなさん地域の方々の期待や風土などについて、それぞれに感じ取っておられるようで、各地域における医療や保健・福祉としての視点はもとより、よりよい地域づくりといった視点でも思いを馳せておられる様子を見るに、photovoiceや肥後狂句も有用であったのではないかと思います。私も地域医療特別実習に限らず効果的でわくわくするようなアイデアを楽しみながら考えていけたらなと学びになりました。

今年は、熊本大学総合診療専門研修プログラムに、新たに三人参加してくれました。彼らが日々の生活の中で自然と学び、気がつけば広い視野をもった自立した医師になっていけるような環境を

整えられるよう自分も研鑽を積んでいきたいと思っています。今後ともご支援ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

鶴田 真三 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座
河浦教育拠点]

今年度は、レジデントを修了した下地先生が河浦病院にそのまま在任していただき、人員的には大きな変化もなくスタートすることができました。地域活動としては、これまで地域や他職種との関りの蓄積と下地先生の持ち前の積極性もあり、介護施設ではじめて勉強会を開催したり、地域での住民向け講座を昨年より充実して行ったり、昨年までよりも一歩進んだ活躍ができたと思います。また、地域活動を行っている「しきちの会」で年3回の食支援をテーマにした勉強会を開催することもできました。さらに、新たに自分は看護学校で授業させていただくようになり、学生への地域医療の教育、特に多くの天草育ちの学生さんたちに天草での医療の楽しさ、素晴らしさを伝える機会をいただきました。大学からの医学生や地域研修で河浦に来る初期研修医も、実習や研修期間以外でも遊びに来てくれる方もいて、天草の地域の楽しさを多少なりとも伝えられたかなと感じています。

医療そのものによる地域貢献はもちろんですが、地域啓発活動や人材育成など、今後も地域貢献になる活動を年々前進して行い、自分たちも楽しんでいきたいと思っています。新たなレジデントとの日々も楽しみです。

これからどうぞよろしくお願いいたします。

中村 孝典 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座
くまもと県北教育拠点]

令和4年度は、熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任助教としてくまもと県北病院教育拠点に赴任し、臨床業務および卒前卒後教育を行いました。また社会人大学院生として研究活動も開始しました。

自身の臨床業務だけでなく、学生、初期研修医、後期研修医の教育業務についても今まで以上に時間を割くことで新たな発見もあり、自分としても

新たな発見がありました。後期研修医に対する教育では、ワークライフバランスを考えるいい機会となりました。

プライベートなことでは7月に第3子が誕生して、それぞれ2学年違いで3人の子供をもつことになりました。出産だけでなく、育児に際して急な休みをとることが増えたため、その都度まわりのスタッフにはかなり助けていただきました。

研究活動については、なかなか研究テーマが決まらずに取り掛かりまで時間がかかってしまい思うように進まず次年度への課題となりました。

子供も増え、仕事や研究活動も行うとなると公私ともに時間の使い方が今後のテーマになってくると思います。臨床のレベルを落とさないという大前提のうえで、学生、初期研修医、後期研修医のモチベーションを上げ続ける指導を目標に次年度も頑張りたいと思います。

2. 拠点指導医・客員研究員

田宮 貞宏 東北教育拠点指導医

[くまもと県北病院 院長／総合診療科]

令和6年度の医療の変化と言えば大袈裟になるかも知れませんが、地域の基幹病院を職場とする私は大きな変化を感じ続けた1年でした。その主要な要因は「診療報酬改定」であるのは間違いありません。

施設基準の改訂に対応するため、病院は評価基準を満たす入院患者の割合を維持しながら、入院期間を短縮する必要が生じました。一昔前の月毎に傷病名を吟味、確定する感覚だと振るい落とされてしまう状況です。

個々の患者の診療を行いつつ、施設基準を維持するための評価基準を漏れなく把握し、全体で入院退院をリアルタイムに制御する毎日を例えると、終わりの見えない疾走感といったところです。決して1日や1年が短くなった訳ではないですが、この疾走感は時間の欠乏感なのだと思います。

もうひとつの令和6年度の改革である「働き方改革」も大切な施策と思いますが、残念ながらこの制度がもたらす時間の欠乏感もあると思っています。欠乏感があると差し迫ったニーズに集

中し易くなると言います。一方その他のことを無意識に排除してしまうようです。これは、そのまま令和6年度の私の反省点になります。

令和7年度は制度による欠乏感の中、本当に重要なものに集中しつつ、その他のことにも目配せをしつつ、気持ちよく疾走したいと思っています。令和6年度は横腹が痛んだり、喉から心臓が飛び出そうだったので。

小山 耕太 東北教育拠点指導医／非常勤講師

[くまもと県北病院 総合診療科／

熊本県健康福祉部健康局医療政策課

熊本県へき地医療支援機構]

「ドキドキが止まらない(動悸ではないですよ!)」

熊本大学に帰還して12年目、教育拠点に赴任して11年目に突入しました。

この11年で総合診療科医局も、たった3名の医局員から31名まで増加しました。それと共にくまもと県北教育拠点(当拠点)の医局員も2名から6名まで増え、発足当初とは比較にならないほど、教育と診療の幅が広がりました。これもひとえに、熊本大学医局員の皆様の支援あつてのことと、感謝する次第です。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。これからも、新入局員を更に増やすべく、教育と診療の質の向上に努める所存です。

私個人としては、2023年4月から熊本県庁医療政策課に兼務の形で赴任し、これまでの教育拠点での取り組みを基に、当初の教育対象を熊本県北地域から熊本県全土に展開する機会を得ました。2024年1月から自治医大卒業医師が義務年限に赴任する現場に赴き、教育・診療支援を開始しております。昨年度の本報告書で、ワクワクが止まらない旨、お伝えしましたが、既に教育支援対象の先生方から直接の感謝のお言葉も頂戴し、当時のワクワクは、今後の発展へのドキドキへ変化しております。

最後に、2025年4月からは兼務から専任の形で熊本県医療政策課に移籍することになりました。このドキドキを将来の医局員の方が楽しめる様に、引き継げる仕事に育てる新しいステップを踏み、医局及び熊本県の組織としての飛躍のため、常に前向きに活動したいと思います。

引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒

よろしくお願い申し上げます。

古賀 義規 客員研究員

[御所浦診療所 所長]

御所浦診療所に赴任して10年になりました。常勤の総合診療科医師2名と非常勤の総合診療科医師、整形外科医師、眼科医師による週1の支援、非常勤精神科医師による2ヶ月に1回の支援により運営しております。今年度も私以外の常勤医と非常勤の総合診療科医師は大学からの支援です。大変ありがたく感謝しております。

今年度の主な活動としては、御所浦診療所での外来診療・訪問診療、御所浦北診療所での週2回の診療・訪問診療を行いつつ、各種予防活動、保健・介護・福祉との連携に力を注ぎました。それとともに、研修医教育・医学生や看護学生への学生教育にも携わらせて頂きました。

2024年末で御所浦島の民間の診療所が休院することになり、当診療所が担う役割・責任も少し増えることになりそうです。

今後も特に離島医療・へき地医療の魅力を伝え続け、ごのような地域で働きたいと思える人材育成に微力ながら尽力したいと考えています。

片岡 恵一郎 客員研究員

[小国公立病院 病院事業管理者]

2018年度より、松井教授のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに所属させていただいており、2024年度が7年目となりました。

大学より支援をいただく地方の立場としての状況をお伝えすると、本年度も、少子高齢化の急速な進行が地方を直撃しつつあることを肌で感じる1年となりました。小国郷の医療・介護のニーズは今後15年ほどは大きく減少しないと予測される一方で、それを担う人材の確保はますます困難を極めております。まさに「津波が来る前に、いかに備えるか」が問われる状況であり、限られた資源の中で縮小均衡を取りながらも、地域が持続可能であるための知恵と工夫、そして技術と連携の力が不可欠であると強く感じています。

このような状況において、昨年度より本格始動した「小国郷医療 MaaS・DX 推進事業」は、地域の課題解決に向けた一助となっています。国のデ

ジタル田園都市国家構想に採択され、熊本大学からもご支援をいただきながら進めてきたこの事業は、2年目を迎え、オンライン診療車「柴三郎号」が地域に根付き始めました。2024年度は約130名の住民に対する保険診療を行い、移動手手段の制約や医療人材の不足といった、地域特有の課題を実際に緩和しつつあります。

また、AIやヒューマノイドロボットの進展も目覚ましく、マンパワーが限られる中、人間が“人間らしい仕事”に集中できる環境づくりへの貢献が期待されます。こうした技術の導入と連携により、持続可能な医療提供体制の実現を目指してまいります。

小国郷で進めている取り組みは、地域医療の未来を見据えた全国的なモデルとなる可能性を秘めており、今後も情報発信と実践を通じて貢献していく所存です。また、地域医療を志す学生や研修医の先生方にとって、リアルで多面的な地域医療の実習素材を提供できる場としての価値も、引き続き高めていきたいと考えています。

本年度も熊本大学をはじめ多くの方々から温かいご支援をいただき、心より感謝申し上げます。今後も、客員研究員として微力ながら役割を果たしてまいりたいと存じますので、引き続きご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

松本 朋樹 客員研究員

[松本内科・眼科 院長]

令和6年度は、牛深・本渡両地域の医療・介護資源を束ね、法人全体で“つながるケア”を合言葉に挑戦を続けた一年でした。天草での総合診療の実践に取り組み、今年度も診療所(松本内科眼科)と天草地域医療センターの二足のわらじを続けています。慢性期から急性期まで、在宅から入院診療まで、地域の患者さんの継続性のある診療に関わることが出来るのが天草の総合診療の強みであると感じています。

法人内の連携だけでなく、地域連携、多職種連携の強化のため立ち上げた地域団体「KAIGO!」も二期目に入り、地域の医療介護職との研修を継続しています。

また、2025年9月には天草の本渡地域に分院となる「天草まつもとクリニック」を開院し、緩和ケア専門医である妻と共に、訪問診療の拠点を

作っていきます。

僻地の医療体制は年々変化し、特に承継問題は大きな課題となっています。その中で、総合診療医の存在は、地域課題を解決するための大きなカギとなると確信しています。

地域としても、島外からの企業参入や地域おこし協力隊を中心とした活動などの刺激を受けて、天草が過ごしやすい地域に変化しているのを感じます。そういった地域の魅力も発信していければと思います。

2025年も天草から、熊本の総合診療に貢献していきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

3. 総合診療科

武末 真希子 医師

[大学院生]

令和6年度も引き続き大学院生として研究活動を継続しました。ようやく本格的にデータの収集を進めることができ、令和7年度早期の論文化を目指して取り組んでおります。また、現在の研究から発展した研究など、在学中に臨床研究に対する知見をより深めたいと考えております。

次年度からは非常勤ではありますが復職し、臨床、教育業務についても役割を全うしていきます。大学院での学びを還元できればと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

松田 圭史 医師

[熊本大学病院 総合診療科]

今年度は、熊本県医師修学資金貸与制度の義務年限を終え、熊本大学病院に勤務することになりました。これまでは貸与医師という立場でしたが、今年度からは貸与医師・学生、そして熊本県の地域医療全体のマネジメントに関わる立場となりました。

その中で、地域で活躍できる総合診療医の必要性を改めて認識し、リクルートや教育にも力を入れていく必要があると感じました。

また、総合診療科の先輩・後輩と関わる機会も多くありましたが、診療だけでなく、研究や教育、学会発表、執筆など、様々な分野でご活躍されて

いるのを目の当たりにし、大変刺激を受けました。

今後も熊本県の地域医療、総合診療に引き続き関わっていくことになるかと思いますが、地域で学んだこと、大学で学んだことを活かしながら、広い視野を持って自分にできることをしっかりとやっていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

空田 健一 医師

[湯島へき地診療所 所長]

上天草市立湯島へき地診療所に赴任し3年目になりました。

熊本県医師就学資金貸与制度による義務のプレッシャーは想像以上に大きいものでした。満了できて、ほっとしました。

地域の医療に携わってきて、「熊本県に総合診療医がもっと増えてほしい」と強く感じております。

さて、第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会において、実行委員会特別企画である「田舎で楽しく医者をする方法」に参加しました。

記憶があやふやになってきておりますが、田舎に仲田和正先生が赴任された際、上級医より年に3回の旅行を推奨されたとのことで、旅の話がたくさんありました。

教育・やりがい・家族が大事と言っておられたと思います。

今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。申し上げます。

平賀 円 医師

[熊本赤十字病院]

医師9年目となる2024年度は、義務年限の最後の1年でした。この1年は自分自身のスキルアップのため、高次医療機関での経験を積みたいと考え、熊本赤十字病院の総合内科を選択しました。熊本市内で勤務するのは初めてであり、マクドナルドまで車で5分で行けること、ウーバーイーツなるものがあることに衝撃を受けました。

熊本赤十字病院は救急車の受け入れ台数も多く、内科への入院患者もかなり多かったように感じます。集中治療が必要な患者も多く、緊張感のある環境でした。また、血液腫瘍内科、腎臓内科、リウマチ膠原病内科の医師と協力しながら、総合内科というスタイルで診療を経験できたことも良

かったです。ネフローゼ症候群の診断から治療を行った患者や、急性骨髄性白血病の診断・治療導入・転院まで担当した患者のことは特に印象に残っています。

初期研修医数も多く、彼らとの「チーム診療」を経験しました。研修医のバックアップとして日々の回診でアドバイスをを行うとともに、私も指導医からのフィードバックを受けながら学ぶ機会にも恵まれていました。

また、論文抄読会に毎週参加し、水曜日木曜日のWEB勉強会には朝7時半から欠かさず出席しました。さぼろうと思えばさぼれる環境ではあるものの、あえてそこで自分に鞭打ち、学習の機会も確保できたことは良かった点です。さらに、研修医向けの外来診療セミナーの企画にも携わったり、レクチャーをする機会にも恵まれました。

この1年間、熊本赤十字病院で過ごした経験は、医師としてのキャリアの中でも非常に価値のあるものだったと感じている。今後は、5年ぶりにくまもと県北病院(前 公立玉名中央病院)に戻ってきました。これまで培ってきた診療の経験、教育への意識、そして困難から逃げない姿勢を活かし、地域医療の要としてさらなる成長を遂げたいです。

社会人大学院の方は、当初は週1で時間確保するとは言っていたのですが中々難しく、進捗はありません。内科専攻医の方の症例登録はぼちぼちといったところです。プログラム移籍に伴い、各所にご迷惑をおかけしましたが、県北病院でも引き続き頑張っていきたいと思います。

久保崎 順子 医師

[熊本医療センター]

令和6年度は、雑誌寄稿や院内学会の機会を通じて、自験例をいくつかまとめました。これまでと同様に、さまざまな症例を通して知見を広げることができていると感じています。

総合診療科には、他院や他科で原因不明とされたケースや、臓器ごとに分類できない疾患が多く紹介されます。個人的には、薬剤性、いわゆる医原病に注目する視点が重要だと考えています。

「クスリはリスク」という言葉がありますが、特に高齢者では、いわゆるDO処方ではリスクになると感じます。SGLT2阻害薬によるケトosisで、嘔気や食欲不振、頭痛、呼吸困難感といった不定

愁訴を呈する例を、これまでに何例も経験しました。そうした視点を持って診ているからこそ気付けた面もあり、頻度としては月1回程度遭遇しています。一度、PPIによる大腸炎も経験しました。

薬が多い方が安心だという患者さんもおられますが、不調をきたしたときに内服薬を見直すことは、総合診療科だからこそ担える役割だと感じており、患者さんにも理解してもらえるようわかりやすい説明を心がけています(処方医の立場も配慮していきます)。

そうした日々の診療の合間に、いま最も気がかりなのは、内科専門医の症例登録です。日々の業務と並行しての取り組みに追われています。

永田 洋介 医師

[球磨郡公立多良木病院]

昨年に引き続き球磨郡公立多良木病院に総合診療専門医として勤務致しました。

総合診療専門医として必要とされることを考えながら活動する1年でした。

総合診療科外来に加え、救急外来での救急対応、一般病棟管理や集中治療管理、診療所勤務、地域公演と様々な経験をしました。今年は医師会生涯教育講座で講師としてお話しする機会を頂き、総合診療専門医の展望に関しても講演致しました。開業医の先生と連携を深め、総合診療専門医が地域で活躍することで地域医療がさらに良くなることを願っています。今後も引き続き成長出来るように研鑽を積みたいと思います。

早川 香菜美 医師

[山都町包括医療センターそよう病院]

この1年間、そよう病院 総合診療科での診療と並行されながら、週に一度、大学病院 緩和ケアセンターでの研修にも精力的に取り組んでこられました。また、自治医科大学卒業医師として、本年度をもって9年間の義務期間を満了されました。長きにわたり、地域医療に貢献してこられたご経験は、かけがえのない財産となることと思います (松井 邦彦)

下地 徹 医師

[天草市立河浦病院]

2023年7月より、天草市立河浦病院での勤務を継続しています。この1年で地域に徐々に馴染み、地元の祭りなどにも積極的に参加することで、地域とのつながりを深めることができました。

診療面では、新たに週1回の高浜診療所での診療を担当するとともに、関連施設である特別養護老人ホームへの回診を年間を通して実施しました。継続的に関わる中で、各施設の職員や患者さんと信頼関係を築くことができ、結果として診療の質の向上に寄与できたと感じています。

特に印象に残った取り組みとして、当院関連の2つの特別養護老人ホームと合同で勉強会を開催したことが挙げられます。それぞれ「施設からの救急搬送事例を基にした救急対応とDNAR指示について」と「人生会議」をテーマに実施しました。勉強会の企画段階から携わり、内容を組み立てる過程を通じて、企画運営の実践力を養う貴重な機会となりました。

また、今年度の個人的なトピックとして、総合診療専門医試験に合格することができました。今後は上級医として、後進の指導や教育にも一層力を入れていきたいと考えています。

松岡 隼平 医師

[阿蘇医療センター]

令和5年～6年度は、阿蘇医療センターで2年間の勤務を行いました。私は総合診療科ですが、ここでは内科医師として従事しました。働く場所により柔軟に働き方を適応させられるのも総合診療科の強みであり、また地域医療の需要にもマッチしており、日々必要とされている実感を強く感じられました。日々の外来・入院・救急外来業務に加えて、前年度も力を入れていた学生・研修医の教育にも注力しました。新たに呼内、脳内、代内、腎内、泌尿器の常勤の先生が増えたので、地域医療の弱点になりがちな臓器別専門診療も嫌厭せず積極的に診るよう心がけました。更には内科症例での振り返りの時間を設けて、チーム全体での内科疾患全般に対する理解の底上げも図りました。幸い学生や研修医からも「楽しかったし勉強にもなった」という声も多数聞け、とても嬉しかったです。

他にも診療所長や特別養護老人ホームの嘱託医も経験させていただきました。そういった現場での実際の医療提供や入所者管理を目の当たりにすることで、教科書には書いていない実状を知り、地域医療の全体像を理解するのにとても役立ちました。また、病院業務と並行した嘱託医業務はとても大変でした。入所者数も多いため、必要な時に必要な情報をすぐに確認できるような管理(カルテ記載の工夫など)を徹底することで、情報の齟齬の予防、二度手間の回避、不要な確認作業の削減を図りました。この色々な性格の違う業務を並行して行うための様々な工夫を通して「情報管理能力」が特に高まったと思います。

また、今年度1番頑張ったと言えるのは、総合診療専門医試験に合格したことです。この自分が義務履行を行いながら最短で専門医取得ができるなど全く思っていなかったもので、関係者の皆様には多大なる感謝を申し上げます。これから受けた恩以上のものを返していける様、総合診療科発展のため尽力していこうと思います。

最後に今年度の目標は「体調を崩さないこと」です。去年10回以上風邪をひいていたので、感染防御の基礎から意識していこうと思います。

本田 宏介 専攻医

令和6年度の上半期は熊本大学病院、下半期は小国公立病院の総合診療科に勤務しました。熊本大学病院では主に救急部で軽症から重症までの初期対応、入院症例を持ち、水曜午後は総合診療科の外来患者カンファレンスに参加しました。

救急部には救急専門医、各診療科の救急担当医師が勤務しており、各科の医師を通して該当診療科へのコンサルトもスムーズにいき、幅広いアドバイスや知識を得ることができました。また、血液検査、CT、MRIが必要だと思ったらいつでもできるのも強みです。下半期の小国公立病院にはCT装置、MRI装置などの医療機器が揃っていますが、夜勤帯での検査は検査技師呼び出しになるため、場合によっては聴診器と心電図検査だけで高次医療機関に搬送する必要があります。大学病院よりも、身体診察や病歴などの聴取がより大切になってくると感じました。また、小国が好きで、小国でできる範囲の治療で良いと言う患者さんが多いのも印象的でした。

西富 友哉 専攻医

令和6年度は天草市立御所浦診療所に勤務しました。受診される患者さんの多くはCommon Diseaseで幅広く、プライマリケアを学ぶ場としてとても良い環境でした。一方で、離島という環境もあり、不便なことも多く、抗菌薬を使いたいけど培養が取れない(そもそも抗菌薬の種類が少なく点滴にいたってはセフトリアキソンしかない)、グラム染色もできない、採血したところで外注なので結果がすぐにはわからない、血ガスも測れない、生食を点滴したいけど100mLパックしかない、レントゲンで胸写と腹単以外の条件は技師さんがいないのでうまく撮れない、外科に紹介した方がよさそうな外傷なのに夕方から船で遠くの病院に行くのは大変だからなんとかここで縫ってくれと患者さんに頼まれて縫合する、等々、これまでにない貴重な経験をさせていただきました。台風で停電し、エアコンも非常灯も消え、手をかざすと出るタイプの水道(ほとんどこのタイプ)も止まり、救急艇も出ない中で救急車が来た際には、江戸時代にでもタイムスリップしたかのようでした。文明の利器ペンライトが大変役に立ちました。

0歳~100歳オーバーまで幅広い年齢層の患者さんと接し、時には保育園や小学校の健診業務も行う中で、診療所が地域にとって必要性の高いものであることを実感しました。いくつもの成功と失敗を繰り返しながら充実した1年間を過ごすことができました。

足立 瑛彦 専攻医

今年度は、前年度より一人きりでできることが増えた。特に、誤嚥性肺炎と腎盂腎炎の診断と治療(抗菌薬投与)までできるようになった。

しかし、まだ課題は山積している。特に、患者や家族への接遇や、オンコール対応で不適切な対応をしたことで叱責を受けたことも、複数回あった。コミュニケーションエラーを起こす回数が多いのが、現在自分にとっての課題の一つである。相手側と意見が食い違い、双方衝突しかけたときは、一旦落ち着いて状況を整理し、現時点で最良の選択をとるところから改善を試みている。

但し、患者家族とのやりとりの困難さは容易に

克服しがたい。臨床医として働き続けることに困難さを覚えてもおり、臨床とは別の進路に変更することも考え始めた。少なくとも、総合診療育成プログラムに所属中は、自分が一人でできることを増やすことと、改善すべきものを減らしていくことを考えたい。それから先は、まず研修を終えてから決めていくことにする。

田添 英典 専攻医

令和6年度は昨年に引き続き、くまもと県北病院で勤務をさせていただきました。4月から10月までは総合診療IIの研修を行い、11月から翌年1月までは小児科の研修を行いました。総合診療IIの領域では昨年に比べるとできることが増え、少しずつではありますが前に進んでいる実感を得ることができました。それと同時に、自分の未熟さを痛感する出来事も多々あり、身体診察や手技はもっともっと勉強しなければいけないと思いました。また、小児科研修では、今までほとんど触れてこなかった小児の感染症について、多くの経験を積むことができました。成人にしろ小児にしろ、正しい診断に至るためには丁寧な病歴聴取と診察が重要であることを学びました。

来年度は熊本大学病院や地域の病院での勤務を控えており、新天地で働けることを楽しみにしています。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

藤本 千里 専攻医

自治医科大学の義務年限後半に入らる中で、今現在の自分に中途半端さを感じ、総合診療科の学問をしっかりと学びたいと思う気持ちが強くなったことをきっかけに、令和5年度より専攻医プログラムに入らせていただきました。令和5年末に出産し、生後3ヶ月の子供とともに派遣先の多良木町から実家に戻り、地元の病院であるくまもと県北病院で勤務させていただけたことは非常に感慨深いものでした。ただ、実際に勤務する中で、産後で体力がなかなか追いつかず、子供も保育園で風邪や胃腸炎を度々もらい、親子揃って体調を崩し、急な早退・病欠で現場の先生方に大変ご迷惑をおかけすることばかりで申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

日当直の業務は体力的に余裕がなく免除いただ

いておりましたが、実家からの支援を大いに受け、この1年間で考え方に関する学びから、貴重な症例まで幅広く経験させていただくことができ、今後の派遣先でこれらの学びをしっかりと還元したいとより一層強く意気込んでおります。学会発表や論文執筆など学術的なことに時間を割く余裕がなかなかなく、しばらくは育児との両立を続けることで精一杯の生活となりそうですが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

4. 事務職員

無田 英昭 地域医療支援コーディネーター

年度末に修学資金制度創設15周年記念の講演会が開催され、3人のご講演を拝聴しました。県医療政策課の笠課長から、熊本は全国的には医師多数県であるものの、35歳未満の医師の割合は全国最小で、若手医師確保が大きな課題との報告がありました。地域医療支援センター長の松井先生から、15年間で約70名の医師が巣立ち地域医療に貢献するなど着実に成果が出ている一方で、医師不足病院間の格差など医師の偏在解消に向けては課題が残っているとの問題提起がありました。本制度の一期生で初の義務年限満了者でもある松田先生のお話から、地域医療に向けられた先生の熱い気持ちを感じました。地域医療に従事されるこうした先生方を応援し、地域の皆さんが安心して医療を受けられるよう、残された課題の解決も含めこの制度を適切かつ円滑に運用していくことが当センターの使命であると再認識しました。来年度は3年目となりますが、引き続き頑張っていく所存です。

川添 光芳 地域医療支援コーディネーター

令和5年4月に地域医療支援コーディネーターに採用され、令和6年度は2年目となり、これまでの経験を踏まえ、ある程度余裕を持って活動できたと思います。

8月に上球磨地域等で実施した夏季地域医療特別実習や、12月に山都町で実施した冬季地域医療特別実習は、事故やアクシデント等もなく順調に実施でき、学生さんが、地域医療の現場で一生

懸命かつ積極的に実習に取り組んでいる姿を目にして、大変頼もしく思いました。

また、私が企画・制作を担当している、地域医療支援機構の広報誌「COCODE!」も、掲載内容をリニューアルしてページ数も増やし、義務を終えられる先輩医師のインタビューや、夫婦ともに医師であるご家族を取材し、仕事と家庭生活の両立などが垣間見れる内容などを新しく取り入れました。今後も読者の視点にたって、内容等を工夫していきたいと思っております。

もう一つ私が担当している、地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座を中心とした地域医療支援体制の構築は、へき地などの医師不足地域の支援が、まだ十分にできていないので、令和7年度は、これらの課題に対応した事業の在り方等を検討するのが宿題と思っております。

令和7年度は地域医療支援コーディネーターの仕事も3年目になりますので、自分で考え行動し、地域医療支援センターや県庁医療政策課の方々に支えていただきながら、微力ではありますが頑張りたいと思っております。

原田 淳子 女性医師復職支援コーディネーター

昨年度は女性医師・子育て医師支援専任の医師がおられず、女性医師の現状もよくわからないまま1年が過ぎましたが、今年度は堤龍子先生に専任医師として着任いただき、一緒にお仕事をして、医師生活の実際を少しですが知ることができました。

地域枠・自治医卒の女性医師意見交換会、通称「♣️ジョイトーク!」は7回開催し、21名の先生方に参加いただきました。皆様お忙しい中でしたが、「色々話ができて良かった」「また参加したい」などうれしいお言葉も頂きました。地域枠・自治医卒だからこそその疑問やご苦労など貴重なお話を伺えました。

また、出産経験のある先生方に「出産前後の勤務等に関するアンケート」を実施し、育休や勤務軽減の状況、困ったことなど率直なご回答をいただき、大変参考になりました。ご協力いただいた先生方には厚くお礼申し上げます。

この1年を通じ、年代・診療科を越えた先生方の繋がりはとても大切だと感じました。この輪が広がるよう、今後も微力ながらお手伝いしてまいります。

山並 美緒 事務補佐員

今年度は主にクリクラ総合診療科のサポートと夏季実習のサポートをさせていただきました。

クリクラ総合診療科では、大学病院・くまもと県北病院・河浦病院の3か所から実習先を選択でき、それぞれ違った視点で総合診療について学ぶことができる実習内容になっています。どの受入れ病院も学生さんが少しでも快適に負担なく実習を行えるように苦慮されています。手厚い待遇で受け入れていただけることに毎年大変感謝しております。

また、夏季実習では、5年ぶりに球磨地域での開催となり、以前お世話になった医療機関へもまた伺わせていただきました。毎年感じるのですが、今年度も通常業務がある中、数か月前から無理を申し立て学生を受け入れる準備をしていただき、実習当日は心のこもったおもてなしをしてくださり、スタッフ一同感激しております。

共通して思うことは、どの医療機関も地域の行政機関も、学生の皆さんに多大な期待を寄せているということです。皆さんもそれを肌で感じておられると思います。その期待に謙虚にこたえていられることを、一熊本県民として切に願いながら、来年度も熊本の総合診療・地域医療を陰ながら支えてまいりたいと存じます。よろしく願いいたします。

木口 知佳子 事務補佐員

今年度4月からお世話になっております。松井先生はじめ教員、事務の方々みなさん優しく迎えて下さって感謝しております。

この一年を振り返ると、地域医療ゼミの担当をさせて頂いたことが一番の思い出です。先生や学生と連絡を取りながらの準備と実施、不慣れで至らない点があったと思います。来年度はより参加率が高くなるようお手伝いしていきたいです。他にも、グラウンドラウンドのハイブリッド開催や、夏季実習への同行等初めて経験することばかりでしたが、事務の皆さんのお陰で緊張しながらも楽しく取り組むことができました。

私生活では、娘は1歳半を過ぎイヤイヤ期に突入、4歳の長男は戦隊モノに夢中で、バタバタとした毎日を送っています。子供の成長スピードに驚きつつ、私もまだまだ成長していきたいと感じ

ています。2年目は、総合診療・地域医療に少しでも貢献できるよう、日々の業務に率先して取り組んでいきたいと思っております。

横手 友紀子 事務補佐員

昨年に引き続き、今年度も機構(センター)業務のサポート、総合診療専門研修プログラムの管理、報告書作成などを担当させていただきました。

今年度は、「熊本県医師修学資金貸与制度創設15周年記念講演」が開催され、県医療政策課の笠課長、松井センター長、そして義務履行を満了された松田先生にご講演いただきました。私自身、その半数近い期間を本制度に関わってきた中で、もしこの業務に携わっていなければ意識することもなかったであろう、熊本県の地域医療を支える医師の存在を身近に感じられることに改めて深い感慨を覚えました。

また、こうして1年間の報告書を取りまとめる中で、多くの方々のご支援とご協力あってこそ、業務が成り立っていることを痛感しております。微力ながら、今後も熊本県の地域医療の発展に少しでもお役に立てるよう、より一層努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

また、日頃よりご協力いただいております関係者の皆さまに感謝を申し上げます。

10 あとがき

令和6年度の活動についてご報告をさせていただきましたが、今年度は地域医療支援機構設立11年目でありました。

今年度も熊本県医師修学資金貸与学生ならびに熊本県出身の自治医科大学医学部生を対象に、地域を学び・地域医療への理解を深めることを目的として、夏季および冬季地域医療特別実習を開催いたしました。実習では、学生たちはフィールドワークや病院見学などに加え、すでに地域で働かれている修学資金貸与医師の先生より地域医療の現状や課題、医師としてのキャリアパスなどの貴重な話を聞く機会を得ることができ、地域医療の現場を肌で感じる貴重な機会になったと思います。今後も学生たちが地域医療に対して高い関心を持ち続け、将来、地域医療を担う人材へと成長できるよう、本実習をさらに充実させていきたいと考えております。実習にご協力いただきました球磨郡公立多良木病院、そよう病院をはじめとした医療機関の皆様、並びにあさぎり町、多良木町、水上村、湯前町、山都町の行政機関の皆様方に、心より感謝申し上げます。

また修学資金貸与医師の3名の先生が本年度で義務年限を終えられることとなり、令和7年3月に県庁で木村知事より感謝状の贈呈が行われました。今後も実習や面談等を通して修学資金貸与学生ならびに医師の皆様のキャリア形成を支援してまいります。

また本機構の広報誌である「COCODE」は今年度より年に1回の発行となり、vol.8を発行いたしました。今後も編集委員として熊本県内の地域医療の魅力を発信してまいります。

最後に平井俊範機構理事長をはじめ、熊本大学のスタッフの皆様、熊本県医療政策課の皆様には多大なるご指導・ご支援を賜り、深く感謝申し上げます。来年度も変わらぬご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院

地域医療・総合診療実践学寄附講座 特任准教授
地域医療支援センター 副センター長

荒木 智

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel:096-373-5627 Fax:096-373-5796
E-mail:chiiki-iryoku@kumamoto-u.ac.jp
HP:http://www.chiiki-iryoku-kumamoto.org/



熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel:096-373-5794 Fax:096-373-5796
E-mail:chiiki-iryoku@kumamoto-u.ac.jp
HP:http://www.chiiki-iryoku-kumamoto.org/dcfgm/



令和6年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

感染症対応実践学寄附講座

